

二〇一六年一月現在、国立市公民館と言語社会研究科の間で、正式な連携協定の計画が進んでいます。すでに国立市と一橋大学の間には数年前から包括協力協定が結ばれていますが、それとは別に、今回の協定がめざすのは、現在すでに遂行中のいくつかの連携企画を今後も最も良い形で継続し、さらなる発展可能性の芽を育てていくための、具体的な連携です。

二〇一三年以来、私のゼミの学生たちを中心に、公民館と、市民のかたがたとの協同によるささやかな企画が試みられてきました。協定にあたり、昨今における人文学の危機に際してそのプレゼンスを云々というもはや聞き飽きた文脈を読み込むこともむろんでできるのですが、そもその発端は、単に、大学という囲いの外へ、「大学通り」を越えて歩み出るようなことをしてみたい、という単純な欲求にすぎなかったのです。大学院という場における多様な学問の営みを、大学のすぐ外側にひろがっている地域社会の営みに、広くは世間というものに、どうしたら自然に、楽しく、互いにとって有益な形でしなやかに接続できるだろうか？ その手さぐりの試みが、協定という形で麗しく終止符を打つのではなく、協定を新たな手がかりとして、さらに広く遠くまで届くようになるならば、それはこのうえなく嬉しいことです。

現在のところ、主な連携活動は、「大学院生講座」と「一橋大学連携講座」の二本で、前者がすでに第七弾を数えようとしていた去る二〇一六年三月に、せっかくだから小さな記録媒体を作ろうという企画が具体化し、その創刊号に載せるために、一連の経緯を振り返る座談会を、大学側の関係者一同で開きました。以下の冒頭に掲げるのはその座談会の記録で、ここはまだ正式協定の話は茫漠とした雲のように彼方に見え始めていたにすぎませんでした。正式な協定が結ばれるとして、それは二〇一七年の春になるでしょうが、それまでの間にも、「大学院生講座」「一橋大学連携講座」がそれぞれ一回ずつ、開催される予定です。特集後半の横組みページには、両講座の概要を知っていただくための資料と、関連年表を掲げておきます。

また、座談会ページの後は、二〇一三年以来ずっと連携活動に参加しその進展を見守って下さった公民館職員と市民のか

たがたによる思い出の記も載せました。これらは、一六年六月に発行にこぎつけた記録冊子『くにたちPOT』ゼロ号に寄稿して下さったものです。こうしたかたがたの厳しくも暖く寛闊なまなざし抜きには何事も始まらなかったでしょう。くにたちという稀有な文教都市に場所を与えられていることを大きな僥倖として私たちは欣びたいと思います。

今年ひそかに創立二十周年を迎えた言語社会研究科は、いまや教員総勢わずか十六名となり、あたかも無人島に漂着した十六少年という趣きですが、それはそれで、ひとつの「別天地」開拓の希望が持てる事態に他ならないでしょう。他方、国立市公民館は、スタッフの規模こそわが言社研と手を組むのにちょうどのごとき大きさとはいえ、その伝統ははるかに古く、筋金入りの公共活動母体です。連携によって学び得るものは、私たちのほうがはるかに大きいに違いありません。